

令和7年度における標準化人材に関する
アカデミアとの連携策について
【実施状況】

学会との連携に関する取り組みについて【前回資料】

10以上の標準化関係学会において、当該学会が関連する標準化活動をテーマとしたセミナー・シンポジウム等の開催を支援

①令和6年度において経済産業省及び日本規格協会委託事業を活用してセミナー等を実施した学会（約10学会）のフォロー（ステップアップ等）を実施し、今後の学会連携のあり方について検討する。

②特定の標準化テーマ（複数テーマ）に関して、関連する学会及び工業会等との合同セミナー、意見交換会を実施する。

③ ①以外の新たな学会（5学会程度）におけるセミナー・シンポジウム等の開催を支援する。

学会への国際標準化情報提供の質・量の強化・拡充の実施

特定テーマ（複数）に関して、ISO、日本規格協会の情報を活用・加工して、関心ある学会に広く情報提供するとともに、オンラインセミナー等を開催して、学会間のネットワーキング構築を促進する。

学会のセミナー、委員会等を標準化に関する研究成果発表の場として提供することについての検討の懇話

①横断型基幹科学技術研究団体連合（以下「横幹連合」）に設置された調査研究会の活動をサポートし、今年度中に標準化に関する研究成果発表会を実施する。

②横幹連合以外の学会における標準化に関する研究成果発表の場の設定を促進する。

学会等における学術誌が査読付きの標準化関係論文の発表の場となりうることについての検討

①横幹連合等の関連学会における査読委員会の設定を促進する。

②上記査読委員会の設置の検討等を促すために、既存の標準化関連の論文の収集・分析を行い、関連学会に提供する。

アカデミア関係者からヒアリングを実施して、大学の教官及び学会会員の標準化活動の評価を懇話する仕組みを構築するための検討

①学会会長クラス（経験者を含む）、大学における評価担当教官、産業界有識者へのヒアリング等を実施し、アカデミアの標準化活動の評価を懇話する仕組みの構築について検討を行う。

②上記検討結果を踏まえて個々の大学及び学会に「仕組みの構築」の検討を依頼する。

令和6年度においてセミナー等を実施した学会（約10学会）のフォロー（ステップアップ等）を実施し、今後の学会連携のあり方について検討する。

➤ 人工知能学会年次総会にて企画セッション（人工知能に関する特許の現状）開催（R7.5.29）…経産省IEC課長等

経済産業省における産業応用に対する取り組み、AI出願に関するIPランドスケープの解説およびAIマネジメントシステム規格の紹介等のプレゼンテーション及びパネルディスカッション

➤ 研究・イノベーション学会「標準化の科学」研究懇談会セミナー開催（R7.7.3）…経産省IEC課長

京大大学生存圏研究所 生存圏未来開拓研究センターの教授、経産省、内閣府等の専門家によるプレゼンテーション及びパネルディスカッションを実施

➤ 人間工学会第66回にてシンポジウム「人間工学標準の拡がり」と国家標準戦略」開催（R7.5.23）

産総研持丸氏、伊藤氏、JIPS藤代等。それぞれのプレゼンテーションとパネルディスカッションを実施。

➤ 日本工学会「会長・フェロー懇談会」にて特別講演「標準化とアカデミアとの連携について」実施…経産省IEC課長

学会（5学会程度）におけるセミナー・シンポジウム等の開催を支援する。

- 日本リスク学会年次総会にて企画セッション「標準化とアカデミアとの連携」開催予定(R7.11.9)

横浜国大野口先生(リスクマネジメント国内審議委員会委員長)、経産省IEC課長、JSA理事等によるプレゼンテーション及びパネルディスカッションを実施

- 横断型基幹科学技術研究団体連合第16回横幹連合コンファレンスにて「国際標準化とアカデミアとの連携～日本がリードした基本規格の国際標準化～」を開催(R7.12.14)

【日本発コトづくりの国際標準化―田口メソッドとQFD―】

○椿 広計(情報・システム研究機構), 山本 渉(慶應義塾大学)

【メッシュ統計の国際標準化の取り組み―ISO 24108シリーズ開発のこれまでとこれから】

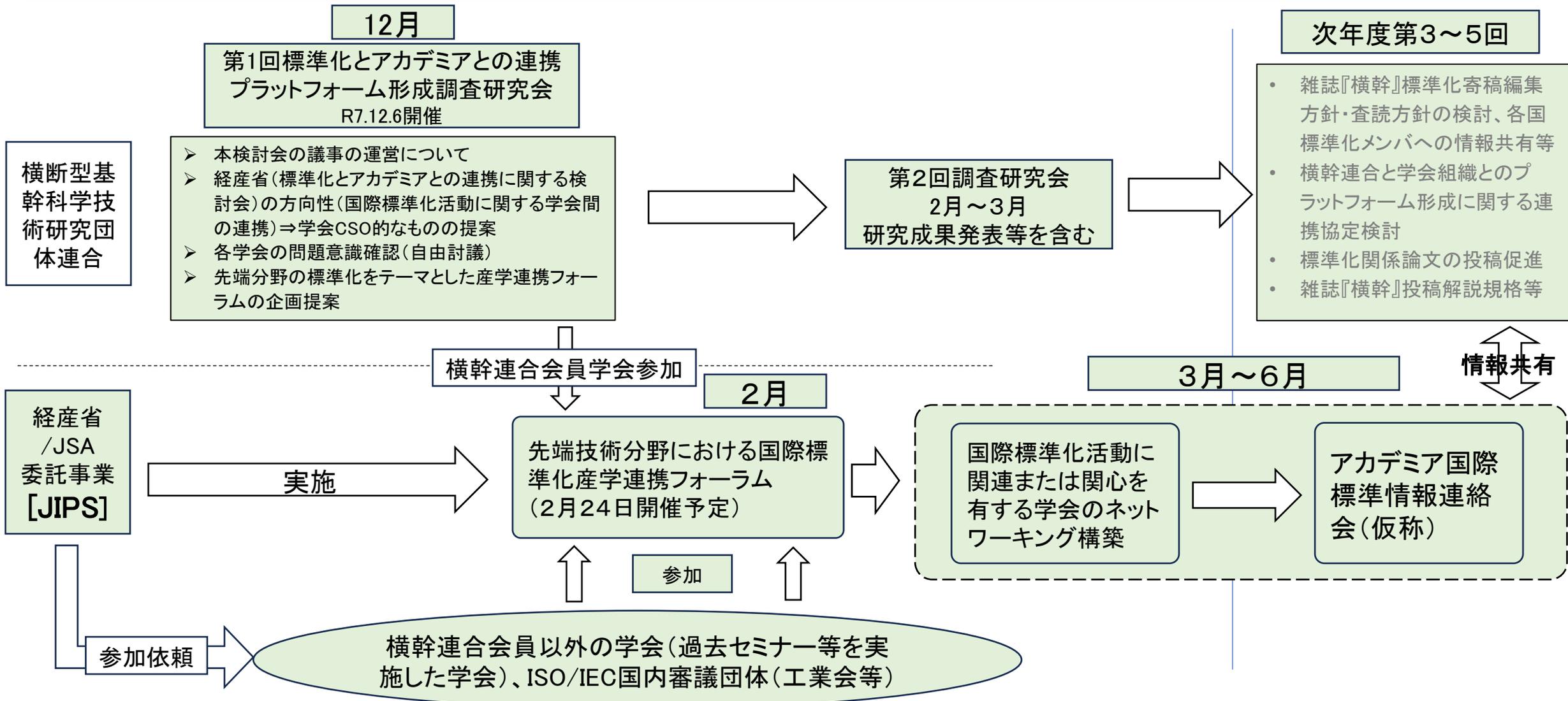
○佐藤 彰洋(横浜市立大学)

【日本がリードした分析・測定の精度に関する国際標準化】

○鈴木 知道(東京理科大学), 尾島 善一(東京理科大学)

- 横幹連合第1回標準化とアカデミアとの連携プラットフォーム形成調査研究会(R7.12.6)

- ▶横断型基幹科学技術研究団体連合（以下「横幹連合」）に設置された調査研究会の活動をサポートし、今年度中に標準化に関する研究成果発表会を実施する。
- ▶横幹連合以外の学会における標準化に関する研究成果発表の場の設定を促進する。
- ▶特定の標準化テーマ（複数テーマ）に関して、関連する学会及び工業会等との合同セミナー、意見交換会を実施する。
- ▶特定テーマ（複数）に関して、ISO、日本規格協会の情報を活用・加工して、関心ある学会に広く情報提供するとともに、オンラインセミナー等を開催して、学会間のネットワーキング構築を促進する。



先端技術分野における国際標準化産学連携フォーラム

1. 日時

令和8年2月24日(火) 10時～12時

2. 開催形式…オンライン・対面併用

3. アジェンダ

(1)人工知能分野における国際標準化動向(ISO/IEC JTC1/SC42)

講演者:産業総合技術研究所 情報・人間工学領域 情報・人間工学領域連携推進室 チーフ連携オフィサー
杉村領一氏

(2)量子技術分野における国際標準化動向(ISO/IEC JTC 3)

講演者:産業技術総合研究所量子・AI融合技術ビジネス開発グローバル研究センター 副センター長 堀部
雅弘氏

(3)上記分野に関連するアカデミアの今後の活動について(パネルパネルディスカッション)

- 先端的標準化活動を支える必要なアカデミアと産業界のエキスパート:大学・学会としてはどういう学会が
ささえているのか?各国はどのようになっているのか?複数学会にまたがる知が必要なのか?
- 特に標準化の中で、国際的・国内分野的に論点、少し意見の分かれる学術・技術的があるとすれば、どう
いうテーマなのか?
- 特にアカデミア・学会の国内支援体制で困りことはあるのか?
- 国際標準化の動向に関心を有する学会は少なくなく、そういった学会を対象としたネットワーキングが可能
となるプラットフォームが必要ではないか?
- 学会における国際標準化活動を通じて、大学側における評価に結び付けることが可能なのか?

学会会長クラス（経験者を含む）、大学における評価担当教官、産業界有識者へのヒアリング等を実施し、アカデミアの標準化活動の評価を促進する仕組みの構築について検討を行う。

【ヒアリング等の概要】

- 学術的に重要な基礎的な規格も少なくない（例えば数字の丸め方（ISO80000-1、JISZ8401））が、実際の大学教育に正しく適用されていない可能性あり。
⇒学会は、教育者同士で「教えあう」場になるのではないか。
- 例えば、マネジメントシステム規格では、国内委員会における産業界側委員の減少していることから、産業界側の評価が不十分であること、同様に基礎的な規格についても産業界側の関与が十分ではなく、ひいては大学側へのフィードバックも少ないのではないか。
- 大学教官の評価軸の一つに「社会貢献」があるが、そもそも社会への情報発信が不足しているのではないか。
- 現状では大学側の評価には国際標準化活動は含まれていない。国際会議への出席に関する大学側の理解が不十分。
- 大学における国際標準活動に関する評価は、当該活動へのeffort、社会へのimpactがポイント。
- 大学の評価に際しては、経産省の産業標準化表彰は有効。アカデミア関係の新たな枠の設定もあるのではないか。
- 表彰は有効。学会内で表彰制度を実施。対象を若年層にシフト⇒大学の評価にも効果的ではないか。

「標準化とアカデミアとの連携に関する検討会」における標準化人材に関するアカデミアとの連携策について①

【これまでの施策実施による解決すべき課題】

1. 昨今のISO、IECでは、先端技術、分野横断的な技術に関する国際標準化テーマが数多く提案され、また、基礎的かつオーソドックスな技術分野についても他の分野における標準化情報が必要なことから、他の学会との連携が重要であること。
2. 単独の学会で担当する国際規格については基礎的なものが多いことから当該規格の改正機会は多くなく、人材育成を実施する際の「OJT」としてのテーマが少ないこと。
3. 先端技術分野では研究開発から社会実装（標準化）までの期間が短く、学会単体だけでなく産業界との連携が重要。例えば学会をプラットフォームとし、標準化をツールとした産業界、大学、国研等の連携の場（オープンイノベーションの一環）も必要であること。
4. 研究者の標準化活動への参加の重要性は理解されているものの、その取組成果を発表する場が少ないこと。
5. 標準化活動単体での評価は難しく、アカデミアの評価の基軸は論文であるが、例えば研究者の方々の研究と標準化活動の関係性等に関する論文の発表の場が極めて少ないこと。
6. こうした標準化活動を評価する場も極めて少ないこと。

「標準化とアカデミアとの連携に関する検討会」における標準化人材に関するアカデミアとの連携策について②

【取りまとめ案】

- ▶ 令和6年度～7年度の3年間における働きかけ等で多くの学会でセミナー等が実施されたこと、一部の学会からは標準化関係のセミナー実施の申し入れがあったこと、横断型基幹科学技術団体連合(横幹連合)、人工知能学会等の総会等において複数年にわたって標準化関係企画が実施されたこと、さらには、横幹連合では「標準化とアカデミアとの連携プラットフォーム形成調査研究会」を設置し継続的に取り組まれる体制が構築されたこと等一定の成果が得られた。
- ▶ アカデミアにおける標準化人材の育成については、アカデミアの方々に、アカデミアにおける研究と社会実装技術である標準化活動とのリンケージを理解していただくことが重要である。
- ▶ その観点からは、個々の学会における人材育成関係の活動(セミナーの開催、個々人による知識・ノウハウの移転等)を引き続き慫慂することは必要である。一方で、学会は基本的には個人活動の集合体であること、事務局体制が十分でないことから、個々の学会での取り組みには限界が存在する。
- ▶ また、社会実装技術(標準化)は、様々な分野における研究成果が複合的に活用されたものであることから、複数以上の学会に対する、アカデミアの方々が関心を有する先端分野の標準化動向の情報提供、それらの情報提供による分野横断的なアカデミアの方々による情報共有の場を設定することによって、上述の研究と標準化のリンケージの重要性理解が促進されることが期待される。

「標準化とアカデミアとの連携に関する検討会」における標準化人材に関するアカデミアとの連携策について②

- したがって、まずは国際標準化活動に関心を有する学会を中心として、アカデミア国際標準情報連絡会(仮称)を設置し、同連絡会の活動を中核として、個々の学会に展開していくことが望まれる。
- 同連絡会は、最終的には自走することが望まれるが、スタートアップ時期については、経産省が協力、支援することが適切である。
- なお、我が国の国際標準化活動は基本的には産業界が主体となることから、経産省による工業会に対する同連絡会への協力要請も必要である。

アカデミア国際標準情報連絡会(仮称)の機能・役割案

1. 目的

アカデミアにおける標準化人材育成に係る長期的かつ継続的観点から、アカデミア活動と標準化活動との連携の重要性をご認識いただくことを目的として、特に先端分野における国際標準化に関する情報共有、国際標準化に関する研究の情報共有を行う。

* 特定の国際標準の開発等には関与しない。

2. アカデミア国際標準情報連絡会の構成メンバー

- 国際標準化に関心を有する学会等(学会に限定しない)
- 可能な範囲で、メンバー学会において担当理事等を設定

3. 開催頻度 年に2回程度

4. 開催内容

- 下記の受託機関が、開催毎にテーマを特定し、かつ、当該テーマに関する国際標準化に関する情報提供を行い、必要に応じて、メンバー学会が課題提起等を行う。
- また情報共有の観点から、メンバー学会による国際標準化活動の成果発表、国際標準化関連研究の発表等を行う。

5. 連携学会

横断型基幹科学技術研究団体連合の「標準化とアカデミアとの連携プラットフォーム形成調査研究会」の活動との連携を図る。

6. 事務局

当面の事務局は、経済産業省の関係委託事業の受託機関が務める。